

# ONE LOVE 通信 59号

2016年12月23日発行

みなさーん、2016年はどんな年でしたか？良いことと、悪いこと、どちらが多かったですか？うーん、私たちはどうかなあ。どちらかというとしんどかったかもしれない。いつもバタバタしていたし、後ろから追いかけているような気がしていたし、精神的につらいことも多かった。それでも今年もたくさんの人と出会うことができ、無事に過ぎようとしています。年齢とともに体力の衰えは隠せないものの、まだまだ元気です。それだけでも感謝しなくちゃ！



さあ2017年はもうそこまで来ている！足元よろけつつもまっしぐらだ！

## 【ガテラ、マラリアからの生還！】

私たち、今日本におります。11月3日から、1月末までの滞在です。相変わらず、日本に戻るとあちこち回って活動の話をさせていただいております。

しかし今回は滞在中ガテラが大変な目に遭いました。マラリアにかかってしまったのです。マラリアは蚊が媒体となってかかる病気。アフリカにはよくある病気です。でも二人が出会って25年以上経つけれど、こんなに重たい病気にかかったガテラを見るのは初めて。今号はそんなお話を。

あれは静岡に行ったとき。静岡では日本に戻るといつも何かを企画してくれる。今回も午前と午後の二つの予定をこなし、いつもなら食事でも…となるのだが、ガテラの調子がおかしい。お昼ごはんもろくに手を付けなかったし、人と話すのもめんどくさそう。だから今日はおとなしく帰ろうと、そのまま新幹線に乗り、茅ヶ崎へ向かった。

が、途中電車の中で吐いてしまった。気持ちが悪いと言っていたから、念のためにビニール袋を持っていたので、車内を汚すことはなかったが、回りの人が怪訝な顔をして、席を立つ。多分酔っ払いが吐いていると間違われたんだろな…。ちょっと悲しい…。

寒気がするというので、おでこを触ると、これまた熱い！帰りに薬局で体温計を買って測ってみたら…。なんと40℃以上あるではありませんか！うわー、こりゃ大変と、とにかく家にあった解熱剤を飲ませて、次の日近くのお医者さんへ。

血液・尿・インフルエンザを調べるも、熱の原因はわからない。しかしやたら血小板の値が落ちてると…。これは何かウイルスにやられた可能性が高いと言われた。少し様子を見ようということで、解熱剤・吐き気止めをもらって週末過ぎますが、相変わらず夜中になると40℃の高熱。そして昼間は少し下がる。体の節々が痛く、吐き気が止まず、食べれば吐いてしまう…。ガテラの目の焦点もあわなくなっているし、私の言っていることに反応するのがとても鈍い…。

…むむむ、この症状はもしや…？そう、マラリアの症状であります。しかし心配性のガテラは、日本に来る前、いつもマラリアの検査をしてくる。今回も出発の数日前に検

査をして陰性のはずだが…。

月曜日、再び近くの医者に行き、血液検査の詳細な結果を聞くものの、要するにここでは手に負えないということで、茅ヶ崎の市立病院へ。

アフリカから来たということが原因なのかはわからないが（怪しい病気にかかっているのでは？と思われたに違いない）、やたら離れた診察室に通され、また血液・尿検査。そしてレントゲンやCTまで撮られた。そして診察室でそのまま待たされること3時間。どうやらマラリアが一番可能性があると診断。しかしここでも十分な設備がないため、救急車で大学病院へ。うーむ、まさか救急車に乗るとは思わなかったぞ。父親が病気で倒れて以来だ。外は雨がぱらついてきて、私の不安を募る。しかし思いのほか、救急車の中って揺れるものなのですね。乗り心地は悪かったです。その中で治療をするのは大変だと思いました。

大学病院の、これが救急救命センターというのか？そんなところに連れていかれた。そこにはたくさんの医者やら看護師やらが待ち構えておりました。

で、診断結果はマラリア。ああ、やっぱりね…。だったらルワンダで検査をしたあの結果はいったい何だったんだ？

すぐに治療薬の投与。しかしここでまた問題。入院する必要があるけれど、空いている病室がなんと一泊7万円！うひゃ〜、いくら何でも無理だ。大学病院ってこんなに高いの？

ここで入院できないとなると、残された選択肢は二つ。横浜にある感染症も扱っている病院に搬送するか、あるいは投薬のみしてもらって自宅に戻るか…。

ルワンダにいとマラリアは比較的的日常茶飯事で、発症すると病院で処方箋を書いてもらい、薬屋で薬を買い、それを飲んで家で休むということが一般的だ。だからあまり慌てない。でも実際にガテラがこんなふうに目の前で高熱を出し、意識も朦朧としている状態で、家に帰って様子を見るだけで大丈夫だろうか？事実、ガテラは私が何を言っているか理解をしている様子もないし、薬を飲ませようとしても、固く口を閉ざし、飲もうともしない。私が一人では対応できるのか？

しかし横浜の病院で入院をされると、費用のことがどうしても気になってしまう。そして病人を目の前にして、

そんな費用のことを考えている自分が情けない…。

しかし命には代えられないのである。そこからまた救急車で横浜の病院に連れて行ってもらうことを決断。こうなったら一刻も早く病院に到着してほしい。

結局そこに着いたのは、夜10時過ぎ。幸い感染症を専門にしているお医者さんも待機してくれていて、すぐに治療を始めてくれた。しかもわかりやすく丁寧に説明してくれる。不安たっぷりの私にはそのわかりやすい説明がありがたかった。



ガテラ、これから救急車で搬送されます。この時はまだ意識もはっきりしていません。問題はここあと。段々と目の焦点が合わなくなっていきます…。

そこでの診断結果は「熱帯熱マラリア」。これはマラリアの中でもたちの悪いマラリアで、治療が遅れば命を落とすこともある。実際、過去私の友人もこれにかかって亡くなっている。ああ、神さま、間に合いました！あそこで下手に自宅に帰ることを選択していたら、もしかしたらガテラはもうこの世にいなかったかもしれません。ガテラがいなくなったら、私はどうやって生きていけばよいというのだ？

お医者さんは治療費のことも心配してくれて、夜中12時前に入院してしまうと、入院費一日分取られてしまうからと、12時を待ってから入院。点滴と投薬、両方から攻めて、本格的なマラリア治療の開始です。

私は終電もなくなり、帰れなくなったので、そのまま病院泊。しかしこの日私は京都の裕福な奥様が集まる式典に呼ばれていて、行かなくちゃいけない。普段おしゃれをしない私でも、せめてきちんとした格好をしていかなくちゃいけないと思うものの、家に戻り着替えている暇もなく、しかも化粧品も持っていなかったため、そのまま顔も洗わず、穴の開いたセーターとGパンのまま行って、会場でそのことをひたすら言い訳がましく謝ったのであります。

入院中のガテラは熱は下がったものの、食欲は全くなく、出される食事ほとんど食べなかった。入院中、いくつかの場所で私はワンラブの話をしなくてはならなかった。ガテラにべったりとくっついて看病はできなかった。一仕事終えて病院に行くと、相変わらず眼力が弱い。が、一言「ミソスープと梅干が食べたい…」。よし！食べたいものは何でも食べさせようと、地下のコンビニに行きカップみそ汁と梅干を購入。みそ汁はおいしそうに飲んだが、梅干はダメ。なぜか？私は昔ながらのあの酸っぱい梅干が好きだから、それをガテラにも食べさせていた。しかし今どきの梅干は変に甘いのでおいしくない。だからこの時ガテラはあれを梅干として受け入れなかったのでありますね。

食欲はないけど、血液中のマラリア原虫の数は日に日に減っていき、治ってきている様子がかがわれた。そして4日ほどで退院することができた。あー、よかった。助か

った！すぐにマラリアだと気が付かなくてゴメン！とにかく落ちてしまった食欲と体力を取り戻してもらおう！

で、退院の日、家に戻ってきて何が食べたいか聞いてみると、何とウガリ。ウガリとはアフリカ全般で食べられているトウモロコシやキャッサバ芋の粉を熱湯でこね固めたもの。結構おなかにどっしり来る食べ物なのだ。それが食べたいということを知って、ああ、やはりこの人はアフリカの人なのだ。お粥をほしがる日本人とは違うのだと、改めて思った次第であります。（もっともその日作ってもあまり食べなかったけど…）それにしても体調を崩してから、本当に食べなかったので、一気に12キロ痩せちゃった…。おなかの皮もタルタル…。

そして現在、少しずつ体力も戻り、食欲なんかむしろ今までよりも食べるくらいまで復活して、今は再び筋トレを始めておりますガテラです。

本当なら二人と一緒にワンラブの話をするはずだったのに、私一人で行かなくてはならなかった場所も数か所あり、皆さまにはご心配とともに、ご迷惑もかけてしまいました。でもガテラ、マラリアから生還、復活しました！

今回日本の医療について、いろいろ感じました。私の愚痴も入っていますが、ちょっと書かせてください。

まずお医者さんや看護師さんたちは、できれば患者の前ではある程度の緊張感をもってほしいということ。救急で連れていかれて、患者そして付き添いはやはり不安です。そのときに病院のスタッフの中に慣れ合いのような雰囲気があると、嫌です。そして今回はマラリアという、日本ではあまりない病気だったので、スタッフも気になるのかあちこちで「マラリア」という単語を発しているのが聞こえてきます。でも内容はわからない。それは私たちに不安を感じさせます。それから患者の治療にあたってるときは、テキパキしてほしいです。これは医療スタッフに限ったことではありませんが、日本の人は歩き方がだらしないです。かかとを踏んづけて、引きずって歩いているような…。医療スタッフは特にそういう歩き方はしてほしくないです。それを見ると、なんだかだらけているように感じるからです。



そして復活したガテラ。去年ルワンダに来てくれた生徒たちと一緒に写真。彼らはもう中学2年生。

それから患者に対して、病状をきちんと説明してほしいし、素人だからわからないと思って、大切な部分をサラッと説明するのはやめてほしい。素人だからなおさら、私たちのわかるような表現で病状を説明してくれなければ、どう対応してよいかわからないではないですか。

それから何故車いすを借りるのに、10分もかかるのだ？運ばれた先で、トイレに行きたいからと車いすを所望

すると、売るほど車いすがあるはずなのに、10分もかかるのですよ！そして「貸してください」といった後に、なぜか病院のスタッフはパソコンに向かう。これはどういうこと？救急搬送されて車いすを借りると、そこでまた別の費用が発生するから、まずその記録をパソコンに入力しているのか？とあれこれ考えてしまった。

またとても気になるのが、患者に対して子供や赤ん坊に話するような口調で語りかけること。いや、それを見るたびに、もしかしたら他の患者はそういう対応を望んでいるのかも？と思い込もうと思うんだけど、やはりダメ。受け入れられない。特にお年寄りや障害を持った人を相手にしたときに、その傾向は強くなる。彼らは赤ん坊じゃないぞ。もっと普通に大人に話しかけるように（当たり前だと思うんだけど…）接してほしいです。

あと医療費も高いねー。ガテラも私も体は健康なので、あまり病院にかからなかったから知らなかったけど、びっくり！今回タイミング的に、ガテラは日本の健康保険に入っていない期間の治療だったから、全額負担となってしまったため、余計に高く感じるのかもしれないけれど、日本で保険に入っていない人もいるでしょう。その人たちは医療費が怖くて、具合が悪くても治療も受けられないのでは、とあってしまいました。

今回のマラリア騒動、いろんなことを知りました。ルワンダのマラリア検査をそのまま信ずることなかれ。マラリア原虫は肝臓に潜んでいるときは、検査をしても見つからないことも多いとか。多分ルワンダで検査した時は肝臓に隠れていて気が付かなかっただろうな。それからいつも

は日本に来るとき、念のためマラリアの治療薬を買って持ってくるんだけど、今回は検査の結果が陰性だったから持ってこなかった。でも念には念を入れて、持ち歩くべきだった。マラリアの薬なんて、ルワンダで買うと安いものだから、今度からは必ず買って持ってくるようにしよう。

それからもしこのマラリアが日本でなく、ルワンダで発症していたら、もっと早く治療ができていたんだろうなということ。アフリカ諸国にはマラリアが蔓延しているのだから、まずマラリアを疑う。私もガテラが発症した時、マラリアをすぐに疑っていたら、もう少し早く治療ができていたかもしれない。日本にはこういう病気を治療するが機関が限られているから、前もって病院を調べておくということも必要だった。転ばぬ先の杖というではないか。

ルワンダで生活を始めて20年。私はどうやらマラリアに慣れてしまい、甘く見ていたようだ。なぜならルワンダで働いているスタッフが、何かにつけ「マラリアになったから仕事を休む」と言うからだ。アフリカ人にとってマラリアは、日本人にとっての風邪のようなものと、すっかり高をくくってしまった。しかしやはり恐るべしマラリア。世界では年間20万人以上の方が亡くなっているのだ。今回ガテラだって危なかったのだ。だからこれからはもっとマラリアに注意して日々過ごそう。よし、ルワンダに帰る前に、押すだけペープをたっぷり買いこんでおくぞ！日本から私たちを訪ねてルワンダにやってくる人は、必ず蚊取り線香を一箱持ってくるように！（ちなみに押すだけペープ、本当によく効きます。コンパクトで持ち歩きするのに便利なので、旅行者は持ち歩くことをお勧めします）



## ルワンダ事務所代表ガテラより

### 【生死の境】

今回は大変な目に遭った。どうも俺とマラリアは因縁関係にあるようだ。

俺は幼いころマラリアにかかって、その治療ミスで足に障害を負った。お尻に打った注射が神経を刺激してしまったのだ。

そして今回またマラリア。きつかった。熱があった時のことは、ほとんど覚えていない。覚えているのは、俺が薬を飲むのを拒んだとき、真美がヒステリックに何か叫んでいたことくらいだ。

以前ケニアでマラリアにかかった時、そこに住んでいた日本人に助けをもらった。その人は仕事があるにもかかわらず、様子を見に来てくれ、食欲のなかった俺に食べ物を見せて運んでくれた。その人がいなくなったら、あの時も危なかったのかもしれない。

マラリアはアフリカにはよくある病気だ。蚊に刺されないように注意をしていたが、感染してしまった。

アフリカの人たちの平均寿命は限りなく低い。40歳代、50歳代がざらにある。これはどういうことなのか？

つまり幼いうちに命を落とすことが多いのだ。だから平均寿命の年齢が下がる。アフリカは医療が十分に整っていない。だから治る病気も治せず、特に弱い子供たちは、あっけなく命を落としてしまうのだ。

アフリカにはまだまだ必要なものがたくさんある。教育、そして医療。これがないためになかなか前進することができない。

真美もよく口にする。日本だったら治る病気も、こころルワンダだと治せない。だから簡単な病気でもすぐに人が死んじゃうと。

実際に二人が出会ってから、たくさんの知り合いが亡くなっている。毎月葬式に行っているような感じだ。

この国が発展するために先に挙げた教育と医療がもっと充実していくように。未来を背負っているのは子供たち。彼らがきちんと医療を受けられ、正しい教育を受けることができたなら、間違いなくアフリカは素晴らしい大陸になるはずである。

ルワンダの平均寿命は56歳。それを今生まれた子供たちが越えられるよう、自分たち大人が力を尽くさなくてはいけない。俺たちのやらなくてはならないことが、まだまだある。

## 【パソコン教室一区切り。】

2015年2月から始まった障害者のためのパソコン教室、17年3月で一度区切りを迎えます。たくさんの生徒がパソコン技術を勉強しました。

彼らが勉強したのは本当に基礎中の基礎。その基礎の技術を使って、印刷物を作り、販売して収入につなげていく、それが目的です。そしていずれは組合を立ち上げ、責任をもって仕事を請け負い、収益を得たい。そこに到達するには、まだ少し時間が必要です。JICAからの資金が途絶える3月には、プロジェクトとしてはいったん幕を閉じますが、引き続き講習を続けていきたいと思っています。



修了証書を受け取って、うれしそうな生徒と講師。勉強をするチャンスが少ない彼らにとって、修了証書は宝物。

また2015年から2人目のコーディネータが日本から派遣されていましたが交代となりました。今は青年海外協力隊としてタンザニアで働いていた男性が後任としてがんばっています。前任が辞めた理由はいろいろあるのですが、若い女性はいろいろとやりづらい部分もあります。起こらなくてよい問題も起こってしまったりして、お互い衝突してしまいます…。だから今度は男性なので、私自身少し気持ち楽です。

問題はやはり運営するための資金繰り。生徒たちが作ったカレンダーやポストカードを販売して資金を作っていますが、それだけでは全く足りません。この件については、引き続きプロジェクトの母体となっている東北福祉大学、そしてルワンダのスタッフと検討を続け、対策を練っています。どうぞ皆さま、パソコン教室が継続できるよう、応援してください。よろしくお願いします。

## 紹介します！ワンラブのスタッフ

8月から日本に義肢装具製作の研修に来ているフィニ。どうやらがんばっている様子です。…と言いながら、まだ彼の研修先を訪ねていません。日本に帰国中に一度は見に行かなくちゃと思っているけど、ガテラのマラリア騒ぎがあったので、いろんなことがたまってしまい、まだ行っていないのです…。フィニ、さばらずそのまま待っておれよ。

でも研修の様子を時々メールで教えてくれたりして、少なくともそれを見る限りはがんばっている模様。彼は日本に着いて、初めて樹脂で作る義足のソケット（切断した部分を入れるもの）に挑戦しました。ルワンダでは残念ながらその材料は手に入らず、以前から挑戦してみたいと言っていたものです。

どちらかというフィニは仕事に積極的ではありません

ん。受け身であることが多いです。でも与えられた仕事は、いろいろ工夫をしながらやっています。研修中はどんな工夫をしているのでしょうか？

彼はブルンジで働いているときは技術者としてではなく受付の仕事だったので、人との対応は上手です。優しい話し方をするので、相手も安心するのでしょうかね。だから話し込みすぎて、私が怒ることもよくありました。さて研修先の人たちとはうまくやっているのでしょうか？



研修中のフィニ。彼が研修を終えて、無事に祖国に帰れるように、皆さんも一緒に祈ってください。

彼の研修は3月まで続きます。今ブルンジの状況は非常に悪いです。去年クーデター未遂があってから、治安は悪化し、未だにあちこちで人が殺されています。でも慣れっこになってしまったのか、最近では話題に上ることも減り、ニュースでも全く取り上げられていません。

フィニが研修を終え、果たして彼は祖国ブルンジに戻るのか？もしかしたらしばらくは戻れないかもしれません。いずれにしても彼が学んだ技術は、ブルンジでもルワンダでも必要な技術です。どちらかの国でその技術はいかされます。

どうかフィニ、同胞のために精一杯勉強してください。あなたが学んだことは決して無駄にはならないのだから。

## 【愛するものを失うということ。】

2016年、私にとって一番つらかったのは愛猫の死です。耳の奥にはまだその子の「にゃ〜ん」という声が響いています。いつも丸くなっていた場所にいない。人であろうと、動物であろうと、愛するものを失った喪失感はいつまでも続きます。前号にもこの猫のことを書いたので、覚えている人もいるかもしれません。

もともとワンラブにはたくさんの猫がいました。ある夜、庭で猫がシャーシャー言っています。その先を見ると、全く見覚えのない毛色の猫。みんなからいじめられています。慌てて抱き上げてみると、まあなんてきれいな猫でしょう。シャムネコみたいなきれいな青い瞳です。でもうちの猫には、この毛色の猫は誰もいません。きっと誰かが捨てたのかもしれない。ならばうちで飼おうと餌をあげ始めます。でもどうにも他の猫と仲良くなれません。ボス猫に追い掛け回され、高い木の上に逃げて降りられなくなったり、せまーいところでひっそりとしていたり…。見かねて家猫にしました。それから私とまこちゃんの蜜月が始まります。家に帰ると、消極的に近づいてきます。とても控えめなのです。そして3年が経ちました。

ある時まこちゃんの異常を見つけます。おしっこに何度も行くのです。しかもろくに出来ないし、血が混じっている。ペットの獣医さんが稀少なルワンダで、何とか信用のでき



る獣医さんを見つけ、治療をし、食事に問題があるということだったので、食事を変えて、これからもっともっと大事に時間を過ごそうと思っていた矢先、彼は死んでしまいました。番犬として飼っている犬に喰い殺されてしまったのです。一か所破れている網戸の隙間から、夜中抜け出し、そのまま戻りませんでした。

翌朝、変わり果てた姿を見て、自分を責めました。どうして気が付かなかったのか？どうして網戸を直しておかなかったのか？どうしてもっと話しかけなかったのか？どうしてもっと撫でてあげなかったのか？お墓を掘りながら、涙が止まりません。



まこちゃん、会えてうれしかったよ。  
あなたのことを思うと、今もとっても悲しいです。  
またどこかで会いたいな

まこちゃんは突然私のもとにやってきて、そして突然去っていきました。一緒にいられたのは4年くらいしかありませんでした。でもその4年は私にとって本当に大切な時間でした。

いつまでもメロメロしているので、ガテラにごめんと謝りました。彼は言いました。死はいつでもどこにでもある。でも人は決してその死に慣れることはないねと。ああ、本当だ。生まれて死ぬのは当たり前。でも両親や祖父母、友人の死に何度出くわしても、その悲しみはいつも襲ってくる。これから何度死と向かい合うのか？つらくても避けることはできません…。

洋服にまこちゃんの毛がついていると、それだけで悲しくなります。写真を見ると、見たいのだけど胸が痛くて目を逸らしてしまいます。

でもね、私のもとに来てくれてありがとう。疲れて家に戻った時、足元にスリスリ寄ってきてくれるだけで、心は癒された。どうかあの世に行っても私のことを忘れないでください。そして虹の橋で私のことを待っていてください。そんなふうに思いながら、またメロメロしている私です。

### 【本当に日本人は思いやりのある民族なのか？】

今回のワンラブ通信は、医療のことも含め、ちょっと私の思うところばかり書いてしまうが、もう一つとても気になっていることがある。

ガテラと二人電車に乗ると、世の中が見えてくるのだよ。ガテラは足に障害がある。だから杖をついている。吊革につかまる姿勢だとしんどいので、いつも入口のところ、手すりに寄りかかる形で電車に乗る。そうすると、今まで上を向いてしゃべっていた人が、急に下を向く。

どうということか？つまり見て見ぬふりをするのですね。意地の悪い私は、つい人の反応を見てしまう。そして文句の一つを言いたくなる。

あるいは彼の肌が黒いからなのか、席に座ると急に立ち

上がってその場を去る人もいる。

何が「お・も・て・な・し」だ！もてなさなくてもいいから、人間として相手を助ける、あるいは偏見のない心を持って！と思うのです。しかも子連れの人。子供に対して大人が人としてやるべきことを示さなくて、子供はどうやって学習するのだ！と毒づく。子供はしっかりガテラが杖を突いているのを見ているのだぞ。それを無視しろと子供に教育するのか！

もちろんそんな人ばかりではないですよ。当たり前のように席を譲ってくれる人がいる。あるいは声をかけてくれる人がいる。その人は2人の子供を連れ、椅子に座っていた。そこにガテラが乗ってきて、すぐに気が付いてくれた。そういう親の姿を見た子供は、知らんぷりを決め込んだ親に育てられるより、ずっとずっと心が育つのではないだろうか？

私はアフリカでよく見かけるこの光景が好きだ。

満員のバス。そこにお年寄り、もしくは障害を持った人などが乗ってくる。と、席に座っていた人が当然のように立ち上がり、席を譲る。子供が席に座っていて気が付かないときは、回りの大人が子供を立ち上げさせ、そこにおじいちゃんを座らせる。では子供はそのまま立ちっぱなしかという、そういうわけでもない。まだ小さな子供だと、その子はおじいちゃんの上に乗っけてもらう。

ただそれだけ。

でもこれって今の日本では見かけられない光景だ。怪しい人もたくさんいる昨今、膝の上に座った女の子に悪さをする人もいるだろう。それ故知らない人の膝に乗るなんて危険！と騒ぎ出すかもしれない。

悲しいなあ。この頃の日本。

持ちつ持たれつがドンドンなくなっていっちゃう。自然に「座りますか？」と声をかけられるような、社会になればいいな。表面だけの思いやりやおもてなしなんぞ、いらん。どうせだったら心で動いてほしいものである。

というか、私、今の日本、もっと年配の人やいろいろな社会的弱者が威張れば良いと思っている。それだけじゃなくて、世の中のお父さんももっと威張れば良いと思っている。しかしこんなふうには書くと、それを勘違いして空威張りする輩も出てくるんだろうなあ。ああ、堂々巡り…。

### 【目指せ！2020東京パラリンピック！】



燃える男の目を見よ！  
俺は出るぜ！  
みんな、応援よろしく頼むぞー！

ガテラ、2020年の東京パラリンピックに出ます！と、そんなに簡単に出来るかわからないけど、とにかく車いすマラソンに出場することを目的に、トレーニングしています。

車いすマラソンに出る目的？それはまだルワンダに車いすの競技がないからです。スポーツを通して、障害者の可能性を広げていきたいと願っているワンラブは、ここでまた一つの可能性をルワンダの障害者に見せたいのです。そしてこれは私の個人的な希望ですが、日本で支援をしてくれた人たちに、ガテラが疾走している姿と一緒に応援してもらいたいです。

去年来日した時、車いすマラソンをしている方からレーサーと呼ばれる競技用の車いすを譲ってもらいました。それをルワンダに持っていき、練習に励もうと思ったものの、どうにもガテラの障害とその車いすが適合せず、トレーニングができません。競技用の車いすも義足と同じ、その人の障害によって仕様が違って来る。だからガテラ、引き続き車いすマラソン出場を目指して、レーサーを探しています。でも決して安いものではありません。一台100万円以上してしまいます。どうぞ皆さま、レーサーを手に入れる方法、手段を教えてください。また資金の援助をお願いします。なせばなる。そんなふうな思いで突っ走ってきたガテラに、そして私たちに力を貸してください。



## 雑文もろもろ

日本に戻るたびに、たくさんの人にお世話になる。いや、戻らなくてもお世話になっている。そんな人たちがいたから、ワンラブはここまでやってこられました。

2017年、ワンラブが義足を作り始めて20年目となります。あっという間でした。でもその反面、長かったようにも思えます。力を貸して下さった皆さま、本当にありがとうございました。この20年間、良いことも悪いことも、本当にたくさんありました。20年前、失うものが何もなかったのが、今より気が楽でした。でも今は失いたくないものがたくさんあるから、どんどん臆病になってきています。やればできるかもしれないことも、怖くてやらずにごまかしてしまうこともあります。

そんな私をいつも蹴っ飛ばし続けているのはガテラでした。できないと思わない。やってみて、ダメだったら軌道を変える。いつもそんな精神で突っ走っています。だから時々一緒にいると衝突します。二人の喧嘩の原因はいつ

### 【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。  
ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いています。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

もワンラブの活動のことです。

ガテラと出会ってから長い年月が過ぎました。25周年を祝おうと思った時もありました。でも結局何もしていません。それでも来年は二人の子供であるワンラブの20周年。だからそれだけは祝おうかなと思っています。

### 【ご寄付ありがとうございました】

…と、いつもなら毎月のご支援の額を書いているのですが、ごめんなさい。今回私の段取りが悪く、まだ計算が終わっていません。でも作った義足などの本数だけお知らせしておきます。

義足 87本

装具 18本

杖 194本

車いす 3人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

### 【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

年賀状を書こうとたくさん買ってしまったはがきや書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思いますので、ぜひお譲りください。

### 【今回、漫画なしでごめんなさい！】

通信の漫画を楽しみにしている人も多いことと思います。そしてあの漫画を私、ルダシグワ真美が描いていると思っている方も多いようです。でもあの漫画、私たちが活動を始めてからずっと長いこと支援してくれている男性が、仕事の合間に描いてくれているのです。今回、日本でバタバタと時間を過ごし、ワンラブ通信の原稿を書くのがギリギリになってしまったのです。だからいつもはその原稿を漫画の作者に見てもらって、漫画の準備をしてもらっているのですが、その時間がなく、漫画なしのワンラブ通信となってしまいました。

あの漫画、実に私の心情を正確に描いており、私も出来上がるのを楽しみにしているのです。ワンラブ通信の文章だけを読むと、だらだらと書かれているので、もしかしたら読まずに捨ててしまう人もあるかと思うのですが、あの漫画のおかげで捨てられずに命拾いしているワンラブ通信であります。

はい、だから次回のワンラブ通信は、しっかりと早めに原稿を書き、漫画の作者Nさんに楽しい漫画を描いてもらおうと思います。皆さま、今回はどうぞお許しください。

それから少しでも節約をと思って、固定電話を解約しました。これからは携帯電話のみとなります。そろそろスマートフォンを持とうと思っているものの、どうにも新しいものが苦手な私はまだ躊躇しています。

また、日本に到着してからパソコンが壊れ、過去いただいたメールを見返すことができず、さらに皆さまのアドレスも同様の状態。どうぞ皆さま、私に何でもよいのでメールを送ってください。そして新たに皆さまのメールアドレスを教えてください。よろしくお願いします。

### 【おことわり】

\* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

\* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

ワンラブ通信 59号 2016年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

